

Title	ベルクソンにおける自由の諸問題
Sub Title	Les problèmes de la liberté chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2013
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.6, (2013. ) ,p.91- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20130000-0091">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20130000-0091</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ベルクソンにおける自由の諸問題

西山晃生

## はじめに

『意識に直接与えられたものについての試論』（1889、以下『試論』）の「序言」でベルクソンは次のように述べる。

はじめの二つの章において強度と持続の概念が研究されるが、これら〔二つの章〕は第三章への導入としての役割を果たすように書かれている。(DI viii)

「強度」も「持続」も、われわれの意識のあり方に関わる概念である。これらを通じてベルクソンは人格的なものと非人格的なもの、内界と外界といった区別を確立する。そのような作業を「導入」とし、そこからさらに一歩踏み出す形ではじめて自由が論じられるということは、意識や人格、あるいは内面そのものの中には自由を位置づけられないということの意味する。

ベルクソンにとって、自由とは一貫して行為に、そして行為にのみ関わるものである。

…自由は行動 *action* そのもののあるニュアンスあるいは質のうちに求められるべきであって、行為 *acte* とこの行為がそうでないところのもの、あるいはそうでありえたところのものとの関係のうちに求め

られるべきではない。(DI 137) <sup>(1)</sup>

行為とは、それが自由になされるときには「内的状態の外的現われ」(DI 125) という形を取る。自由の問題は、この「現われ」がいかなる形でなされるかにかかっている。「具体的自我とその自我がなす行為との関係」(DI 165) が問われるのである。

「外部に身を置く観察者」(DI 113) は、行為と物理現象を決定的な形で区別することができないため (DI 113)、この関係をとらえることができない。従って、自由は行為の当事者によって「直接」理解されるのでなければならない。実際、ベルクソンが批判する自由意志の擁護者もベルクソン自身も、自由を肯定する上で依拠するのは「意識の証言」(DI 112, 129, 131, 163) である。ただし、意識の証言はしばしばわれわれを欺く。

われわれは自由に行為していると信じるかもしれないが、後から反省することによってようやく自分の誤りを認めるだろう。(DI 127)

このように理解されると、自分自身を観察し、自分がなすことについて推論することにこの上なく習熟した人においてすら、自由な行為は稀である。(DI 126)

こうして、自由をめぐる議論は「証言」の正確さという水準で争われるだろう。実際、『試論』第三章でベルクソンは論敵の「意識の証言」が虚偽に満ちたものであることを暴き立て、自らの「注意深い意識の証言」(DI 131) をそれに対置する。

われわれとしては、ベルクソンの記述を検討し、彼にとって自由とは何であったのかを明らかにしたい。以下、本稿は次のように進行する。第一節においてはベルクソンの自由論の「導入」となる諸概念を導入する。第二節と第三節においては、ベルクソンが二つの自由肯定論に対して為し

た批判を取り上げ、彼自身の問題を絞り込む。これらすべての段階において、「意識の証言」つまり自己理解の正確さが問題になるだろう。

残念ながら本稿ではベルクソンの自由論のすべてを論ずることはできないが、結論では残された問題の所在を示す。

## 1 意識の諸相

『試論』の第二章は「数える」という作業の分析から始まる。何かを数えるときわれわれは対象を等質なものとみなす、つまり「個別的な差異を無視する」(DI 57) のでなければならない。「対象や個物の個別的な特徴に注意を集中するやいなや、それらを枚挙することはできても総和を求めることはもはやできない」(DI 57) からである。従って、実際に数えられているのは、知覚される特徴を持った何ものかではなく、それらに対応してはいるが「質を剥奪され、いわば空虚にされ」(DI 65) た何ものかであるということになる。

また、われわれは「純然たる継起」(DI 58) のうちで、つまり絶えざる生成消滅のもとで何かを数えることはない。数えられる対象のうち先行するものが何らかの形で残存するのでないかぎり、後続するものをそれに加えることはできないからである。たとえば、一定の間において鐘が鳴り続けるとき、その回数を数えようとしたら、現に聴こえている音とすでに消失した音を少なくとも想像上は並べることができるのでなければならない。従って、諸対象の区別を保ったまま併置する仕組みがどうしても必要になる。

これらの要求を満たすもののことを、ベルクソンは「空間」と呼ぶ。空間とは「…精神が数を構築するときの素材であり、精神が数をそこに位置づける媒体」(DI 63) である。もともと質を欠いている以上、空間はどのような仕方で分割されても同一のものであり続ける。それゆえ無限に分割可能であり、無限に多くの区別された部分を持つことができる。何らか

の形で多を含むことができるもののことを「多様性」と呼ぶならば、空間は多様性のひとつのタイプをなす。それは「判明な多様性」(DI 59)あるいは「数的多様性」(DI 92)である。こうして空間は、それが何に属しているかはともかく、諸事物を相互外在的な形でわれわれに理解させるものとして現れる。空間はわれわれが何かを数えるときの道具であるというよりは、むしろそのための条件である。空間を直観することによってはじめわれわれは「はっきりとした区別を施し、数え、抽象し、そしておそらくは話すことさえできるようになる」(DI 73)。

ところで、質を欠いているために、空間には種類というものがない。また、数的多様性である空間はそれ自体ひとつしかない(もし、数的に区別される複数の空間があるならば、今度はその多数性を支える別の原理が必要になり、無限後退に陥る)。

…空間が等質なものと定義されなければならないのであれば、逆に等質で無際限ないかなる媒体も空間だということになりそうである。  
(DI 73)

諸個人にとっての空間は、無際限に広がった同じひとつの空間にほかならない。従って、空間は「共通領域」(DI 96)あるいは「公共領域」(DI 124)をなす。

…等質な空間を直観することは、すでに社会生活へ歩を進めることである。動物はおそらく、自らの諸感覚に加えて、自分とはっきり区別され、すべての意識ある存在に共通の所有物であるような外的世界を、われわれと同じように表象することはない。諸事物のこうした外在性と、それらの媒体のこうした等質性を明瞭に思い描こうとする傾向がわれわれにはあり、それは共同で生活し、話すようにわれわれを導く傾向と同じものである。(DI 102-3)

さて、事物を相互外在的な形に並び立てて処理することは「あまりにも快適である」(DI 102) ため、われわれは自らの意識まで空間を媒介にして理解しようとする。しかし、「共通領域」である空間はひとりひとりの意識に固有なあらゆる質を欠いているので、われわれは自らの心理状態を「非人格的な様相」(DI 96) の下で眺めることになる。また、諸事物の併置と区別はそれらの不変性を含意しているので、空間を介したときわれわれは自らの意識を生き生きと変化するものではなく「不活性な」(DI 101) 要素の寄せ集めとして理解することになる。

こうした空間の介入に、ベルクソンは実にさまざまな言い回しで繰り返し言及するが<sup>(2)</sup>、共通するのは、空間が「根底的自我」(DI 96) を損なってしまうという事態である。従って、意識を「直接」(無媒介に) とらえること、いわば純化した形で取り出すという作業は「再び自分自身になる」(DI 67) ことに等しい。争われる場は「持続」である。

たとえば、一分という時間の経過を示すために時計の振り子が六十回揺れたことを表象する場合、われわれは実際には何をしているのだろうか。六十回の揺れを一挙に思い描くのであれば、それは時間の経過を示さない。しかし、継起する一回一回の揺れにのみ注意を向けるのであれば「絶えず現在に留まることを強えられる」(DI 78) しかない。残された仮説は一つである。

最後に、私が現在の揺れのイメージに結合した形で、それに先立つ揺れの記憶を保存するとすれば、二つのうち一つが帰結する。これら二つのイメージを併置し、最初の仮説に戻るか、それとも一方のイメージのうちに他方を覚知するかである。後者の場合、二つのイメージはあるメロディの音のように相互に浸透しあい、自分たちを組織することによって、われわれが区別なき、あるいは質的多様性と呼ぶ、数とはいかなる類似点も持たないものを形成するだろう。

こうして私は純粹持続のイメージを得るのであり、また等質的な媒体あるいは計測可能な量の観念から全面的に解放されるだろう。(DI 78)

このようにして、「判明な多様性」と対照をなす「区別なき多様性、あるいは質的多様性」(DI 78)としての純粹持続が得られる。後者に関して、より明確には次のように定義される。

まったく純粹な持続とは、われわれの自我がただただ生き *se laisse vivre*、現在の状態と先行する諸状態との間に分離を打ち立てるのを控えるときに、われわれの意識の諸状態が取る形態である。(DI 74-5)

分離の欠如は諸状態の相互浸透、有機的組織化を意味し、またおのこの要素が全体を表象するということも含意する。

二つの多様性の違いは本質的であり、相容れないように思われる。「このように、われわれの自我のうちには相互外在性なき継起があり、自我の外には契機なき相互外在性がある」(DI 81)。しかし、「外在性なき継起」と「継起なき外在性」との間には「物理学者たちが内浸透現象と呼ぶものによく似た一種の交換が生じる」(DI 81)とベルクソンは述べる。要するに、われわれは意識の持続をも空間を介した形で理解してしまう—つまり継起する諸瞬間を区別してしまう—。こうして「内的かつ等質的持続」(DI 81)という「誤った観念」(DI 81)が生じる。

これは、われわれが自らの意識をどうとらえるかという自己理解の問題である。「自我が自分自身へと立ち返る」(DI 123)こととは、意識のあり方を(空間を介さず)直接把握することに他ならない。

しかし、「誤った観念」あるいは「自我についての、また意識状態の多様性についての不完全な考え」(DI 119)という評価とは裏腹に、自己認識における空間の介入はベルクソンにおいて必ずしも否定的に扱われてい

るわけではない。

なるほど、二つの多様性のあり方に応じて「意識的生の二つの相を区別する」(DI 95) ことはできるだろう。そして、その各々に「根底的自我」と「自我の影」(DI 95) あるいは「寄生的自我」(DI 125) を見出すこともできるだろう。しかし、われわれは「外的世界から引きこもる」(DI 67) ことも、「純粋に個体的な生を生きる」(DI 102) こともできない。「共同で生活し、話す」(DI 103) ことが必要とされる以上、「不断の生成」(DI 97) である自我が等質的媒体を通じて「屈折させられ」(DI 96) 「細分化される」(DI 96) ことを受け入れるより他ない。「われわれの外的でいけば社会的な生のほうが、内的で個人的な現実存在よりもわれわれにとって実践的な重要性を持つ」(DI 97、強調は引用者) のである以上、そうするほうが「自我の利害にかなっている」(DI 103)。

こうして、一種の譲歩がなされる。意識をそれ自体においてとらえたなどと称さない限りにおいて、また「具体的で生きた自我を、相互に区別され、等質的媒体のうちで併置される諸項の連合としてわれわれに提示し」(DI 104) たりしない限りにおいて、空間を介した自己理解は正確とはいわないまでも、誤りではない。

判明な諸瞬間や明瞭に性格づけられた諸状態を有する内的生は、社会的生活の諸要請によりよく応じることになるだろう。表面的な心理学であっても...こうした生を記述することに満足していれば、そのために誤りに陥ることは避けられるだろう。(DI 103)

さて、ここまでベルクソンにおいては自我のあり方が二つに区別され、それはわれわれが自らを理解する二つの仕方に帰着するのだということを示してきた。従って、ベルクソン自身も注意を促すように、ここでは「人格を二重化する」(DI 103) こと、つまり複数の自我というものを想定することは問題になっていない。自我のあり方をいかに区別したところで、

それらが「同じひとつの自我」(DI 103)であることには変わりがないのである。

数的な区別の代わりに「深さ」のイメージが導入される。われわれの具体的な意識のあり方は、諸状態が相互浸透し、全体が有機的に組織化される「深層の意識事象」(DI 102)と、「等質的媒体のうちで展開され」(DI 93)「相互外在的な諸部分へと裁断される」(DI 94)「表層的な心理的生」(DI 93)とに間で揺れ動いているということになるだろう。そうであるならば、いかなるときにわれわれは深層の自我であり、いかなるときに表層の自我にとどまるのか、という疑問が生じる。しかし、この問題に関しては本稿の結論で触れることにして、次節では以上を踏まえたベルクソンの自由論を検討する。

## 2 自由とは何か

前節の議論を要約すると以下ようになる。(1) 意識は、その「直接的な」形態においては、異質な諸状態が相互浸透し、有機的に組織化されている。そして、全体として変化し続ける。(2) そうしたいわば「深層の」状態から遠ざかり「表層」へ向かうにつれ、意識は「不活性」で「非人格的な」諸要素へと分解される。(3) 意識の深さは、われわれが意識をどのように理解するかにかかっている。(4) 表層において意識を理解することは、意識状態を言語によって表現するために、また社会の内生きるために必要である。

本稿の冒頭で述べたように、ベルクソンにおいて自由とは行為の自由である。従って、以上を踏まえた上で今度は意識と行為との関係が問われなければならない。具体的には、行為に至るまでの「熟慮」(DI 119)というものが問題になる。

複数の要素へと解体され「不活性」かつ「非人格的」な相の元でとらえられた意識のあり方は連合主義の前提をなす、とベルクソンは述べる

(DI 101)。もろもろの観念が連合されるためには、まず区別されなければならないからである。「この種の結合、まったく単純でいわば非人格的な諸感覚の結合にこそ、連合主義理論は適合する」(DI 123)。ベルクソンの自由論は、この連合主義が決定論と結びつくという指摘 (DI 117) から出発する。

連合主義的決定論は、自我を精神状態の集合として表象し、その中で最も強いものが支配的な影響力を振るい、他の諸状態を従えろと考える。この説は従って、共に存在する精神の諸事象を明瞭に区別する。(DI 119)

判明に区別された諸状態、すなわち「諸々の意識事象、感覚、感情、観念の寄せ集め」(DI 124) がそれぞれわれわれを動かす力を持つとしたら、その一つ一つが行為の動機となるだろう。行為は諸動機の力関係によって決定される。動機の中で最も強いものが実際に行為を導くことになる。「勝利は必然的により強いほうにもたらされ続けるだろう」(DI 128)。

しかし、諸々の心理状態が行為の動機として「魂を圧迫する」(DI 124) のだとしたら、魂すなわち人格そのものは心理状態と区別され、「惰性的で中立的な」(DI 133) ものになってしまうし、心理状態のほうも各々が区別され、名指されている以上、変化を容れない。このような理解の元では、決断という、必然的に変化を伴う事態を説明することができない。

しかし、熟慮するのが常に同じ自我であり、その自我を動かす二つの相反する感情も同様に変化しないならば、決定論が援用する因果律の働きそのものからしても、いかにして自我は決断するというのか。(DI 128-9)

こうして、連合主義は決断に至る熟慮のあり方を説明できないという「自我についての欠陥を伴う考え」(DI 119)であることが明らかになる。しかし、連合主義的な前提から導かれるのは決定論ばかりではない。決断が具体的にはどのようなかを説明しないのであれば、それは反対に自由意志 *libre arbitre* を擁護することも可能であるように思われる。というのも、自由意志の擁護論は根拠なき決定をこそ支持するのだから。

決定に根拠がないということは、実際になされたものとは異なる選択も可能だったということを意味する。こうして、選択可能性として自由は理解され肯定される。「...彼らは、われわれが行動を自由に遂行するときには他の行動もまた等しく可能だったはずだと主張する。この点に関して彼らは行為そのものに加えてそれとは反対の決断を選び取る能力をわれわれに理解させる意識の証言を引き合いに出す」(DI 131)。問題はこの「意識の証言」が意識のあり方に忠実か否かである。

肯定されるにせよ否定されるにせよ、選択可能性としての自由は、行為へ至る意識の進展がある時点から二方向へと分岐するような形(Y字型の図)として表象される。ベルクソンが批判するのはまさにこうした表象の不正確さである。一方で、われわれは行為がなされた後でしか分岐した先を描くことはできない。しかし他方、行為がなされた後では、選択されなかった方向を選択された方向と「等しく可能な」ものとして描くことはできない。自由意志の擁護者は、行為がなされた後に身を置きながら、そのことを忘れ、熟慮から行為へと至る進展の一時点に恣意的な仕方では決断の瞬間を割り振る。これは「粗雑な象徴主義」(DI 134, 7)にほかならない。

ベルクソンからみれば、決定論と自由意志の肯定論は表裏一体の関係にある。どちらも意識を判明な、そしてそれら自体は人格とかかわりがない諸状態へと分解し、それとは別に惰性的で中立的な自我を想定する。いづれにしても、自我は自らの力で決定することがない。ただ、前者は自我のうちに力を一方的に被る必然性を見出し、後者は常に他の可能性へと開

かれた偶然性を見て取るという違いが存するのみである。いまや、「具体的な自我と、それがなす行為との間の関係」(DI 165)を考え直さなければならぬ。

「生きた自我」(DI 126)が取り戻される。仮に相反する状態が認められ、躊躇がなされるにしても、自我はそれらの間でじっとしているわけではない。「相反する二つの状態を経るにつれ、自我は肥大し、豊かになり、変化するという事に注意しなければならない」(DI 132)。熟慮の間じゅう、不変かつ中立的なままにとどまり、諸動機によって決定されたりされなかつたりする自我など存在しないのである。

熟慮の全瞬間において、自我は変容し、それゆえ自らを動かす二つの感情をも変容させる。相互に浸透し、強めあい、自然な発展によって自由な行為へとたどり着く諸状態の、ひとつの動的系列 *série dynamique* がこうして形成される。(DI 29)

熟慮する自我が全体として変容しつつ展開するものであるということだけであるならば、前節で確認したことと基本的に変わらない。しかし、ここで問題になるのはあくまで行為の自由である。以上の議論を踏まえながら、ベルクソンは「自由な行為」を規定する。

要するに、われわれが自由であるのは、われわれの行為が自らの人格全体から発し、人格の全体を表現するとき、行為と人格との間に、芸術作品と芸術家の間にしばしば見出されるあの定義しがたい類似が存するときである。(DI 129)

この規定は謎めいている。行為が人格を「表現する」となぜ自由になるのが説明されていないからである。この「表現としての自由」の意味合いを解明するためには、もうひとつの自由擁護論を斥けておかなければ

ならない。以下、節を改め、『試論』以外の資料を用いてこのことを確認した後で「表現」の問題に立ち戻る。

### 3 自由の意義

前節で見たようなベルクソンの自由論は、以下のような解釈を導くかもしれない。特定の動機ではなく人格の全体、つまり人の性格あるいは個性と呼ばれるもののみが原因となり、その結果として生じる行為こそが「自由な行為」である（これが、前節末尾で言及した「もうひとつの自由擁護論」に他ならない）。たとえば、黒田亘が『行為と規範』の中で伝統的な自由論を批判した後ベルクソンを擁護して以下のように述べる時、そのように解釈している可能性がある。

…私の信じるところでは「自由な行為」とは、多年の経験を通じて形成された人格的主体の個性を明瞭に表現する行為、自我の表面に属するのではなくその深層から発する行為である。従来の自由論が説いてきたのとは逆に、その行為者の、その状況における行為であるかぎり反対の行為の可能性を考える余地のないような行為、それ以外はありえないほどに人格的に決定された行為、それこそが「自由」のあかしとなる行為ではないか。<sup>(3)</sup>

ベルクソンは、アンドレ・ラランドが編集した哲学事典の「自由」の項目へ寄せた短い文章の中で、彼の考える自由は「完全に自分自身であること」(M 833)に存すると認める。そして、それは「人の、自らでないすべてのものからの独立」(M 833)と言い換えられる。しかし、その言い換えが成り立つのはあくまで「ある程度」(M 833)である。なぜ「ある程度」にとどまるのかというと、その独立とは「結果が原因によって必然的に決定されるように、自らに依存するのではない」(M833、強調はベ

ルクソン) からにほかならない。

行為と人格を区別した上で、両者の間に因果的な関係を確立することはできない。「内的因果性の関係は純粹に動的であって、相互に条件付け合う二つの外的現象の間関係とはいかなる類似もない」(DI 164) からである。

...観念と行動との間には、ほとんど感じ取られない中間項が置かれるのであり、その総体はわれわれにとって、努力感と呼ばれるあの独特の *sui generis* 形を取る。そして観念から努力へ、努力から行為への進展は非常に連続的なものであるため、われわれはどこで観念と努力が終わり、どこで行為が始まるかを言うことができない。(DI 158-9)

人格は行為を含めた形で理解される。ベルクソンにとって行為は人格から導き出されたものであると同時に、それ自体人格の一部であり、人格をいわば完成させるものである。一方において、行為は人格のすべてを「要約する」(DI 139) ものであるため、人格を抜きに行為を理解することができない。他方、熟慮から行為に至るまでのすべてがひとつの人格をなしているため、行為抜きに人格を理解することもできない。「表現」がもたらす「定義しがたい類似」とは、こうしたいわば内的な関係(というのも、人格と行為を分離してしまったらこの関係は理解されなくなるだろうから)の事を指す。

さて、以上でベルクソンが何を自由と呼んでいるかは確認した。人格と、そして人格とのみ不可分な形で結びついた行為のあり方がそれである。しかし、「なぜそれを自由と呼ぶのか」という問題がいまだに残っている。

本稿では、ベルクソンにおいて行為が自由であるための条件を二つ指摘した。第一に、自我が細分化された形でではなく、全体として理解されるのでなければならないということ。第二に、行為は人格と区別されるの

ではなく、人格の一部として理解されなければならないということ。ところで、既に見たように、ベルクソンは自由が「完全に自分自身であること」に存すると考える。自由であるための条件も「完全に自分自身である」ための条件と等しい。もっとも、第一の条件はベルクソンにとって自由を論ずる以前の前提である。自由論が付け加えたのは、第二の条件、つまりわれわれは内面に沈潜するときでなく、自らの人格をかけて行為に臨む瞬間にこそ、「自分自身である」ということに他ならない。

こうして、ベルクソンの自由論は自我の社会性へと帰着するだろう。といっても、それは事物の相互外在性を支える空間をわれわれが共有することによって社会生活が可能になる、いう事態とは異なる。「内面」として理解された人格が、その内面性を保ったまま「外界」へと立ち現れる、という飛躍こそが人格を完成させる。

#### 4 結論

第一節の終わりで触れたようにわれわれの自我のあり方は、われわれが自らをどのように理解するかにかかっている。そして、自我を意識の諸状態へ細分化することには根拠がないわけではない。こうした事情は行為をめぐる自己理解に関してもまったく変わらない。

しばしばわれわれは行為の原因を特定の心理状態に帰す。多くの場面で、われわれは「そうであることがまったく有利であるがゆえに」(DI 126) 自動機械としてふるまい、自動機械として自らを理解する。「日常的行動の大半」(DI 126)、「数こそ多いがそのほとんどは取るに足らない行動」(DI 127) に関してはそのように理解して差し支えない。

従って、自由が問題になるのは、例外的な重要性を有するような「重々しい状況 *circonstances solennelles*」(DI 128) においてである。ただし、こうした状況は自由な行為の必要条件であって十分条件ではない。というのも、「われわれはより深刻な状況においてもしばしば自らの自由を

放棄するし、人格の全体がいわば振動すべきであるのに、惰性と無気力 *mollesse* のために、この同じ局所的過程が遂行されるままにしてしまう。」(DI 127) からである。「人格の全体を表現する」つまり、「そこに...人格の経歴全体が反映している」(DI 125) ような行為のことを自由な行為と呼ぶのであれば、それは非常にまれである。「多くの人は...真の自由を知らずに死ぬ」(DI 129)。そこで、(第一節でそうしたように)「われわれはいつ深層に自我に達するのか」と問われるのと同様「われわれはいつ自由であるのか」ということが改めて問題になる<sup>(4)</sup>。

しかし、この問いに関する答えは、ベルクソンの自由論の性質からして与えられ得ない。というのも、自由な行為がなされるための十分条件を一般的な形で規定することは、行為に向かう自我のあり方を前もって定めておくことにほかならず、そのこと自体によってわれわれを自我の「動的進展」から遠ざけてしまうためである。

われわれの行為が常に自由であることなど考えられないし、またそうである必要もない。われわれにとって、日常的な状況は習慣化されたふるまいによって切り抜けるほうが都合がよく、重大な状況に直面したときのみ全人格を動員して対応することが求められる(後者がベルクソンの意味での自由には他ならない)。状況の深刻さとともに、それにふさわしい行為の性質は変化する。つまり、行為は時宜に応じたものでなければならない。時宜性は『試論』より後の著作でも、ベルクソンが行為を論ずる際に重要な役割を担うだろう。自由論はそうした行為論の一部を担うことになる。だが、このことに関しては稿を改めて論じたい。

(にしやま・てるお 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

---

\* ベルクソンのからの引用は著作の略語と頁数によって指示する。引用される文献は以下のとおり。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige/PUF, 1889=2007

---

(合田正人、平井靖史訳『意識に直接与えられたものについての試論』、ちくま学芸文庫、2002)

M: *Mélanges*, Press Universitaires de France, 1972

- (1) ベルクソンにおいて「行動 *action*」と「行為 *acte*」はほぼ同じ意味で用いられていると思われるので、本稿でも特に区別しない。ただ、「自由な活動 *activité libre*」(DI 127, 他)という表現も用いられており、こちらのほうは検討の余地がある。この点に関しては Bouaniche [2011] を参照。
- (2) 「われわれの経験の基底そのものを形成する異質性への一種の反動」(DI 72)、「純粹意識の領域への空間観念の闖入 *intrusion*」(DI 73)、「反省された意識に憑依する空間の亡霊」(DI 74)、「不正な形で *subrepticement* 空間が導入される」(DI 77) など。
- (3) 黒田 [1992]、87 頁(強調は黒田)。この後、黒田はわれわれが第二節の最後で引用したのと同じ箇所を引き、「自由の考察はほぼこのような方向に試みるべきだろう」と続ける。黒田がベルクソンの「表現としての自由」をどのように理解していたか、この記述のみから読み取るのは難しい。しかし「人格的に決定された」という記述は、人格と行為との分離を前提にしていると理解することが(少なくとも)可能である。ベルクソンが批判しているのはまさにこうした分離に他ならない。
- (4) この点に関してウォルムスは以下のように述べる。

内部の深い感情と、その感情を意図や行動へと引き入れる外部の深刻な状況との邂逅 *rencontre* によって、持続する自我は行為することができるということが突如として明らかになる。この邂逅は、決断という非常に明確な心理的作用を通じて、時間的総合という内的作用をいわば出現させるのである。(Worms [2004], pp.81-2, 強調はウォルムス)

なるほど、われわれの「深い感情」(つまり、全人格を染め上げるような感情)と「深刻な状況」に直面することとの間にあらかじめ定められた関係がないのであれば、両者が相伴って行為を導くことを「邂逅」と呼べるかもしれない。問題はその「邂逅」の性質である。

#### 文献表

Bouaniche, Arnaud. [2011] «Lire l'Essai à la lumière de l'acte libre», in [Worms et Riquier 2011]

---

Lalande, André. [1926=2002] *Vocabulaire technique et critique de la philosophie* Quadrige/  
PUF

Worms, Frédéric. [2004] *Bergson ou deux sens de la vie*, PUF

Worms, Frédéric et Riquier Camille (dir). [2011] *Lire Bergson*, PUF

黒田亘[1992] 『行為と規範』、勁草書房